演題番号：D13

トイ・プードル集団における急性胸腰部椎間板ヘルニアの臨床的特徴

○左　享祐[1)]，松尾芽衣[1)]，中本美和[1)]，中本裕也[1) 2) 3)]

[1)] Neuro Vets 動物神経科クリニック・京都市，[2)] 大阪公大，[3)] 京都大

1. はじめに：胸腰部椎間板ヘルニア（以下、TL-IVDH）は犬の代表的な脊髄疾患であり、犬種ごとに異なる特徴を有する。日本を筆頭にアジア諸国で人気の高いトイ・プードル（以下、TP）においても本疾患を診断する機会が多い一方で、犬種的傾向を記述した報告は見つからない。こうした背景から急性TL-IVDHと診断したTP集団に関してその臨床的特徴を調査した。

2. 材料および方法：2020年2月～2024年5月の間に、急性の胸腰部脊髄障害を疑う臨床徴候を主訴にNeuro Vets 動物神経科クリニックへ来院し、MRI検査でTL-IVDHと診断したTPを対象とした。発症後1週間以内に動物病院を受診したものを急性と定義した。対象の年齢、神経学的重症度（Grade1～5の順に背部痛のみ、歩行可能な対不全麻痺、歩行不能な対不全麻痺、深部痛覚陽性の対麻痺、深部痛覚消失の対麻痺）、罹患椎間、脊髄軟化症（以下、MM）の推定診断を含めた悪化傾向および外科的減圧後の予後に関して評価した。

3. 結　果：32頭が該当し、平均体重は4.09kg、年齢中央値は7歳9ヵ月、神経学的重症度はGrade1～5の順に3、12、1、6および10頭で、L1-2椎間を最多とする胸腰椎移行領域での罹患が目立った。発症後に悪化傾向を呈した7/13頭でMMの合併が推定診断され、これら7頭の年齢中央値は3歳6ヵ月であった。外科的減圧後の予後は19頭で評価され、Grade1～4の8/12頭およびMMの推定発症例を含むGrade5の2/7頭が改善した。

4. 考　察：本研究のTP集団では中高齢での発症が一般的であったがMMと推定診断した7頭は3歳6ヵ月と、より若齢での発症傾向が認められた。さらに発症後に悪化を示した犬の54％でMMが疑われ、これらの特徴はMMの危険因子となる可能性が考慮された。Grade5の70％でMMが疑われたが、これは既報の10～33％と比較して著しく高い割合であった。画像検査や術中所見を踏まえた推定診断であるため主観的バイアスの関与を否定できないが、本集団のGrade5における外科的減圧後の予後に負の影響を与えた可能性が示唆された。本研究はTPにおける急性TL-IVDHに関する臨床的特徴を記述した最初の報告であると同時に、TPが国内での飼育頭数最多犬種である我が国においての臨床的意義は特に大きいものと考えられた。